

助詞「に」の意味役割変換 (I)

山 本 和 之

本稿は、「に」の多義性を、〈着在点〉という統合的な意味役割のどの部分に焦点をあてるか、その違いに対応した認知ドメイン・意味役割変換を行うことによって説明しようとしたものである。生成文法において一定の役割を果たしてきた意味役割 (semantic or thematic role) と認知意味論を繋ぐ試みのひとつである。

1. はじめに

項構造 (argument structure) を設定する文法理論においては、項構造は主要統語要素との接点 (対応関係) をなし、全体的な見取り図から言えば、統語構造と意味レベルの概念構造 (conceptual structure) を結ぶインタフェイスとして機能しうるものであった。項構造は、意味役割ないしは変項 (variable) によって表示されていた。山本 (1995) は、当時すでにいろいろな方面から侵食を受け、その理論的必然性を失っていたとも言える意味役割を、語彙概念構造の一部に対するラベルとして活用できるという考えのもとに、〈着在点〉という融合的・マクロ的意味役割を提案するとともに、日英語における〈着在点〉の語彙概念構造を検討したものであった。その中で、〈着在点〉の具体的事例として日本語から取り上げたのが「に」であった。

日本語「に」のプロトタイプの意味は、(1) ~ (7) のような、空間領域で使用されているものであるが、到達して存在するという統合的なスキーマの、どの部分が焦点化されるかによって意味の違いが生じている。¹

- (1) 昨日図書館に行ったが、休館だった。
- (2) 太郎は美穂に手紙を出した。
- (3) 箱の中にお菓子があるよ。
- (4) 庭の池には大きな錦鯉が泳いでいた。
- (5) 壁にペンキを塗ってちょうだい。
- (6) 荷物を車の助手席に載せた。
- (7) 全員こちらに來ています。

(1)、(2) の「に」は着点 (到達点) を表し、(3)、(4) は在点 (在り場所) を表す。(5)、(6) の「に」は着在点を表す。ペンキを壁に塗るには、ペンキを壁のところに移動させ

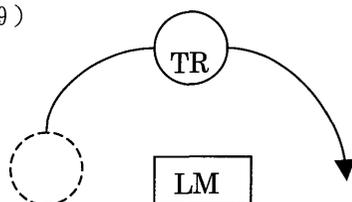
(〈着〉)、壁面に付着(〈在〉)させねばならない。同様に、(6)の「載せる」も〈着〉と〈在〉を引き起こすので〈着在点〉の「に」である。²(7)の「に」は、「来る」の〈着〉と「いる」の〈在〉の意味が融合した融合型〈着在点〉である。

そうすると、「に」の実際の用例では、「に」は個々に着点、在点、着在点を指すことになり、「に」に付与した〈着在点〉というマクロ的意味役割との関係が問題になる。これは、〈着在点〉のどこの部分をプロファイル(部分焦点化)するか、つまり、〈着〉を焦点化するか、〈在〉を焦点化するか、あるいは〈着在〉全体に焦点をあてるか、その違いによってこの三つの意味の違いが現れる、というのが私の説明であった。

当時、認知言語学では、イメージ・スキーマを介した意味拡張・多義性の研究が行われていた。Brugman (1981)、Lakoff (1987)、Dewell (1994)などのoverの研究もその例である。Dewell (1994)は、(8)に見られるようなoverの中心的・典型的意味を(9)のイメージ・スキーマで捉え、overの多義性を、部分焦点化やトラジェクター変換等のイメージ・スキーマ変換を介在させることによって説明した。³

(8) The dog jumped over the fence.

(9)



下記(10)は、半円形経路の中央部のみがプロファイルされた事例であり、(11)は上昇していく経路前半部が、(12)はこれとは逆に下降する経路後半部が、(13)は経路の頂点部のみがプロファイルされている事例となる。

(10) The plane flew over the hill.

(11) The sun came up over the mountains.

(12) Sam fell over the cliff.

(13) The plane should be over Baltimore by now.

山本(1995)は、認知言語学の波が一気に押し寄せる中で、それまで重要な概念として使用されてきた意味役割を活用するという立場から、日英語の〈着在点〉(の語彙概念構造)を考察したものであった。かなり以前から考えていたことを纏めたものであったが、興味がすでに認知意味論へと移っていたのと、焦点化の違いによる関係づけなど、認知意味論と同じ方向を辿っていたため、それ以上意味役割を考察することはしなかった。今回再度「に」の意味役割を取り上げたのは、従来の意味役割と認知意味論を繋いでみようという意図からであり、具体的には、「に」

の多義性を、〈着在点〉という統合的な意味役割のどの部分を焦点化するか、その違いに対応したドメイン・意味役割変換を行うことによって説明しようとしたものである。

以下、意味役割〈着在点〉の焦点化されている部分を囲み線によって示すことにする。従って、〈着在点〉、〈着在点〉、〈着在点〉は、それぞれ〈着〉、〈在〉、〈着在〉が焦点化されていることを示す。矢印は認知ドメイン・意味役割変換を示す。

2. 1. 移動ドメイン〈着在点〉 ——> 尺度ドメイン〈到達点〉

目的地への移動は、尺度へ変換する。自分の家を出て目的地の学校に着くまでに、バス停、公園、銀行等、いろいろな節目(目盛)がある。移動の経路が尺度として捉えられると、「に」は尺度上の到達点を表すことになる。典型的な例は(14)～(17)のように到達点に特定の数値が示されている場合であるが、(18)、(19)のように、到達点までの範囲を示す例もここに含めることができる。前者は移動の着点が焦点化されたもの、後者は移動の経路の方が焦点化されものと捉えることができる。

- (14) 損害は100億円に達した。
- (15) 世界記録に1秒及ばなかった。
- (16) 参加者は500人にもなった。
- (17) 参加者は10人に満たなかった。
- (18) 1キロにわたり木がなぎ倒されていた。
- (19) この地域では三十年に一度大地震が起きる。

以下の(20)、(21)のような例では、纏めたり分けたりすることによって、当然到達先の数値がもとの数値から変化している。そうするとこれらは、セクション4で扱っている状態変化の到達点とも捉えることができる。このような二様の捉え方を許す例については、2.7. のところで、二重機能と区別して、再度触れているので参照していただきたい。

- (20) 荷物をひとつにまとめた。
- (21) お菓子を10人に分けた。

2. 2. 移動ドメイン〈着在点〉 ——> 尺度ドメイン〈基準点〉

2.1. の「に」が、トラジェクターが尺度上(=経路上)どこまで到達したかその到達点を示すのに対して、こちらは到達点が比較の基準点として機能し、トラジェクターがその基準点と比較して尺度(=経路)上のどこに位置づけられるかを示す。着点に到達したもともとのトラジェクターは消え、経路上の新しいトラジェクターが到達点(基準点)と比較されることになる。(22)では、駅を基準点として見たとき、銀行が尺度上(経路上)の駅に近いという範囲内に存在していることを示している。このような例ではまだ銀行と駅とは空間的な遠近関係にあるが、

(23) では抽象的な遠近関係となる。(24)、(25) では、一郎が基準点の次郎を超えて行けば勝ちとなり、そこまで達しなければ負けとなる。

- (22) 銀行は駅に近い。
- (23) 一郎は父親に似ている／そっくりだ。
- (24) 一郎は次郎に大勝した／負けた。
- (25) 一郎は次郎に持久力では勝る／かなわない。

2.3. ドメイン融合

尺度ドメインの基準点との関連で、ドメイン融合とそれに伴う意味役割融合について触れておきたい。(26)～(29)の「に」は、次の2.4.で述べるように、方向の行き先(向い先)を示し、<対象点>を表す。それと同時に、述語は主語が持つ属性の度合いを示している。(26)を例にとれば、息子に対するきびしさの尺度上で、一郎はきびしい部位に位置しているのである。方向軸がきびしさを測る尺度として働き、息子を尺度の端において測ると、一郎はきびしいという目盛りのところに位置していると言える。そうすると、「息子」は方向ドメインの<対象点>としても、また、尺度ドメインの<基準点>としても機能していることになる。こういう事態をドメイン融合と呼ぶことにする。⁴ なお、ドメイン・意味役割の重層性については2.7.も参照していただきたい。

- (26) 一郎は息子にきびしい。
- (27) 一郎は寒さに弱い。
- (28) 一郎は英語に強い。
- (29) 一郎はかつての侵略者に(対して)憎しみを抱いている。

2.4. 移動ドメイン< 着 在点> ——> 方向ドメイン<対象点>

移動の到着点は方向を示す。移動が抽象化されると、到着点までの実際の移動はなくなり、移動の経路は方向軸(目線の経路)に変容する。到着点は方向の行き先、目標に変容し、トラジェクターも心の動き、働きかけ、作用や影響といった抽象的な移動物に変わっていく。「に」はそういった抽象的な移動の対象点を示す。下記(30)～(35)がその例である。

- (30) 一郎に仕事を頼んだ。
- (31) 花子に一目惚れした。
- (32) 直線 AB に対して垂線を引く。
- (33) 花子は義母に憎しみを抱いていた。
- (34) 批判にしっかりと答えないといけません。
- (35) 一郎はいま子供の心の問題に取り組んでいる。

(36) こんなことでは学生の士気に影響する。

(37) 一郎に論文捏造の疑いがかかった。

2. 5. 移動ドメイン< **着** 在点> ——> 行為ドメイン< 目的点>

人は通常何か目的があって他の場所へ移動する。移動の目的は、そこへの移動をひとつの行為とみた場合、行為の達成目標（到達点）である。従って、移動ドメインの目的地（着点）と行為ドメインの目的の間には写像関係が成立している。言うまでもなく、移動の場合も行為の場合も、所期の目的（移動の場合は目的地に着くこと、行為の場合はその目的が実現されること）は達成されないことがある。なお、移動の目標とその行為の目的は共存しうる。下の(38)は移動の目標（目的地）が前景化され、(39)はその行為の目標（目的）が前景化され、(40)はその両方が表出された例である。

(38) 今朝市役所に行ってきた。

(39) 今朝所得証明を取りに行ってきた。

(40) 今朝所得証明を取りに／取るために市役所に行ってきた。

2. 6. 移動ドメイン< **着** 在点> ——> 力流ドメイン< 起力点>⁵

移動の‘着’と‘在’と‘発’は隣接概念である。人は到着し（着）、そこにとどまり（在）、そしてまた去っていく（発）。「に」がメトニミー的にこの三つの用法を持っていたとしても不思議はない。移動の途中を見れば、着いては去り着いては去りの繰り返しとなり、着と発は隣接する。

着と発の関連性は多くの言語で見られる。「に」に対応する与格が受け手だけでなく、動作主として力の始発点となるのは、いろいろな言語で見られる現象である。英語においても、古代英語では、現代英語の受動態の by 句に相当するものを、名詞の与格で表すことが可能であった。まず、動詞が<起力点>の「に」を要求する例から見てみよう。

(41) 皆さんにお褒めの言葉をいただき光栄です。

(42) 絵里は義男に宝石をもらった。

(43) 絵里は義男に英語を教わった／習った。

(44) 絵里は義男に携帯電話を借りた。

(45) 絵里はその噂を義男に聞いた。

(41)～(45)では、「を」格のトラジェクターが、「に」格参与者から主語位置の参与者((41)では話者)へと移動する。「に」は「から」で置換可能であるが、「から」はモノの移動の起点を表すのに対して、「に」の場合は移動を引き起こす力の起点として把握されている。従って「に」格には、通常、人（有生名詞）が来る。「一郎にお金を借りる」ことはできても、「*銀

行にお金を借りる」ことはできない。また以下のような例もその証拠としてあげることができる。これらはトラジェクターの移動の点では(41)～(45)と同じでありながら、「から」は取られても「に」は許さない。

(46) 絵里は義男から／*義男に高価なダイヤの指輪を買った。

(47) 絵里は義男から／*義男に宝石を盗んだ／奪った。

(48) 絵里は社長から／*社長に結局辞令を受け取った。

(41)～(45)と(46)～(48)を比べてみると、起点参与者と受け手参与者との間で、意図性の高さの違いがあるのが分かる。前者では、「を」格名詞の移動に関して、主語位置の参与者は受動的に参加しているのに対して、後者では、逆に、主語位置参与者の意図性・有責性が高い。主導権(事態を引き起こした第一の責任者)が主語位置参与者にあると言ってもよい。こういう動詞は、「もらう」のような授受動詞に比べると、意味的に複雑な場合が多い。例えば、お金を支払って、あるいは相手の承諾なしに強引に手に入れる、といった事態は、単純な授受による移動よりも複雑であり、その分、行為者(主語)の意図がより多く要求されると言える。他方、(41)～(45)のような場合は、移動を引き起こした直接の行為者は「に」格の行為者で、主語位置参与者の有責性は低い。⁶

上に見てきたように、「に」格名詞は、移動を引き起こす行為者・動作主としての機能を有している。その結果としてトラジェクターの移動が引き起こされるので、移動の起点にもなる。動作主としての力をもたない無生物の場合は、(49)～(51)のように、起点性ないしは依存性のみ前景化する。

(49) 金属疲労に起因する断裂

(50) ラテン語に由来する呼称

(51) 法の定めによる処罰

いずれにせよ、移動の着点を表す「に」が起点として拡張される場合、混乱を引き起こさないように、抽象的な意味での起点として拡張されたと思われる。

力の起点を表す「に」は、(52)～(54)のような、被害の受身を含めて日本語の受身文に現れる「に」がよく知られている。(55)～(57)のような例も、「に」は人に強い感情を引き起こす力を持った起力点として機能しており、受身形も可能である。

(52) 一郎は花子に叱られた。

(53) 帽子が風に飛ばされた。

(54) 一郎は途中で雨に降られた。

(55) 執拗な批判に苦しんだ／苦しませられた。

(56) 息子の非行に悩んだ／悩ませられた。

(57) 花子の突然の出現にびっくりした／びっくりさせられた。

2. 7. 二重機能

使役構文の(58)や受益表現の(59)では、「に」格は動作主として働いており、力の起点を表すが、他方、主語との関係から見れば、主語の意図・力・働きかけが及ぶ被動作主(patient)でもある(本稿の扱いでは方向ドメインの<対象点>になる)。つまり、「に」は<対象点>と<起力点>という二つの機能を同時にもっていることになる。これを二重機能と呼ぶことにする。

(58) 太郎は次郎にひとりで行かせた。

(59) 一郎は親に家の購入費を出してもらった。

ドメイン融合(セクション2.3.)の場合は、一つの文の中に二つのドメインが合体(あるいは混合)しているが、こちらの方は、継起的に起きる二つのドメインが、(60)のように終わりの部分と始まりの部分でひとつの要素を共有しているのである。統語的には、「～(さ)せる」、「～してもらう」が補文をとるという構造に反映されている。

(60) - - - >○——>

なおこの二重機能は、2.1.のところで触れた解釈の二重性とは別物である。(61)のような例では、「に」は原因とも状態(抽象的場所)とも取れるが、これは「に」の解釈にゆれがあり、「に」がどちらの意味にもとれる(究極的には認知主体の状況の捉え方にゆれがある)という意味での二重性で、ここで言う二重機能やドメイン融合とは性格が異なる。

(61) 強風に洗濯物がはためいていた。

3. 1. 移動ドメイン<着[在]点> ——> 属性ドメイン<所在点>

(62)～(67)のような例は、「に」が能力や感情、知覚などが存在する場所(所有者)を表す例としてよく取り上げられるので、ここでは触れるだけにとどめる。この「に」は、(68)～(71)のような存在の「に」と同じものなのであるが、違いは、後者では個々の属性が「が」格名詞として明示されているのに対して、前者では、属性が述部の形(「五ヶ国語が分かる」(能力)、「花子の合格がうれしい」(感情))をとっていることである。

(62) 一郎には書き取りがとても難しかった。

(63) 一郎には花子の合格がともうれしかった。

(64) 一郎には五ヶ国語が分かる。

(65) 一郎にはギターが弾ける。

(66) 一郎には亡き妻の声が聞こえた。

(67) 一郎には採れ立ての山菜がとてもおいしかった。

(68) 一郎には優れた音楽的才能があった。

(69) 一郎には五ヶ国語を理解する力がある。

(70) 一郎には自信がなかった。

(71) 一郎には不平等に対する怒りがあった。

3. 2. 移動ドメイン<着^在点> ——> 属性ドメイン<領域点>

上例(62)～(71)では、「に」格名詞と属性は、所有者—所有物の関係にあり、所有物の方をトラジェクターとして選んだ構文であるが、これとは逆に、所有者の方をトラジェクターとして選んだと思われるのが(72)～(75)である。「喜び(の感情)」、「瞬発力」はそれぞれ「彼(の顔)」、「この車」が持つ属性であり、「彼(の顔)」、「この車」の‘満ちている’点(領域)、「欠けている’点(領域)である。同じことを、所有物の方をトラジェクターにして、(76)、(77)のように言うこともできる。

(72) 彼の顔は喜びに満ちていた。

(73) この車は瞬発力に欠ける。

(74) 太郎は決断力に欠けている。

(75) この土壌は有機質に富んでいる。

(76) 彼の顔には喜びが満ちていた。

(77) この車には瞬発力が欠けている。

なお、英語の *English abounds in idioms. ~ Idioms abound in English.* のような例も、所有者—所有物の間の転換である。

4. 移動ドメイン<着^在点> ——> 変化ドメイン<移行点>

(78)～(84)のような状態変化・機能変化が空間移動になぞらえて理解されていることは、改めて言うまでもないことであるが、(83)、(84)のような例では、「詩」、「絵」は、「悲しみ」、「風景」が変化した形なのか(そのときは「に」は状態変化の「に」)、それとも「悲しみ」、「風景」の表わされる抽象的な意味での場所なのか(そのときは「に」は存在場所の「に」)、どちらの見方も可能である。しかし、個々の「詩」や「絵」は創りだされるものであって最初から存在するものではないという点を考えると、「悲しみ」や「風景」の変化した形として捉える方が自然であろう。

(78) 蛹が蝶になった。

(79) 紙を三角形に切る。

(80) 財務官僚を顧問に迎える。

(81) 雨で会場が体育館に変わった。

(82) 先生が鬼に見えた。

(83) 最愛の子を失った悲しみを詩に詠む。

(84) その風景を絵に描いた。

なお上の例文のような「に」の用法を、<着[在]点>や<着[在]点>からの投射ではなく、<着[在]点>からの投射としたのは、状態移行においては、事物はある状態(機能)に移行しその状態(機能)にとどまるからである。従って、<移行点>も、移行とその後の「在」を含んだものとして理解していただきたい。これに対して、(85)～(87)に見られるような状態・様態の「に」は、移動ドメイン<着[在]点>からの投射である。⁷ これは続稿で扱う。

(85) 静かに歩きなさい。

(86) 一郎は友達を待たずに帰ってしまった。

(87) 一気に水を飲み干した。

5. おわりに

今回扱ったのは、「に」の用法の一部である。続稿に回した用法や検討課題も多いが、考察の方向性は示すことができたと思う。

注

1. 「に」の多義性はこの違いに対応しているというのが、私の考えである。
2. 移動を引き起こす動詞には大きく分けて2種類ある。ひとつは「行く」「歩く」のように移動を目的とした動詞、もうひとつは、「乗る」、「塗る」、「置く」のように、その行為を成し遂げるために移動が付随的に引き起こされる動詞である。「山に登っているときには」の「登る」は前者の用法であり、「山に登るときは」の「登る」は後者の用法である。
3. TR=Trajector LM=Landmark
4. Fauconnier and Turner (1996) 等の Conceptual Blending が参考になる。
5. ‘力流’とは‘力の流れ’の意味で、‘起力点’とは‘力の起点’の意味で使っている。
6. 「借りる」の場合、借りる申し出をしたのは主語名詞句であっても、借りられるかどうかは、先方の意向次第である。
7. 状態・様態は空間領域(場所)になぞらえて理解されている。

参考文献

- Anderson, John M. (1971) *The Grammar of Case*, Cambridge University Press.
- Brugman, C. (1981) *Story of 'Over': Polysemy, Semantics, and the Structure of the Lexicon*, Garland.
- Croft, W. (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*, University of Chicago Press.
- Dewell, R. B. (1994) "Over Again: Image-Schema Transformations in Semantic Analysis," *Cognitive Linguistics* 5.
- Fauconnier, G. and M. Turner (1996) "Blending as a Central Process of Grammar," *Conceptual Structure, Discourse, and Language*, ed. by A. Goldberg, Stanford, Center for the Study of Language and Information.

- Heine, B., U. Claudi and F. Hünnemeyer (1991) *Grammaticalization. A Conceptual Framework*, Cambridge University Press.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*, MIT Press.
- Kabata, K. and S. Rice (1997) "Japanese *ni*: The Particulars of a somewhat Contradictory Particle," *Lexical and Syntactical Constructions and the Construction of Meaning*, ed. by Vespoor, M., K. D. Lee and E. Sweetser, John Benjamins Publishing Company.
- Lakoff, G. (1987), *Women, Fire, and Dangerous Things*, The University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *The Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*, Basic Books.
- Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. II, *Descriptive Application*, Stanford University Press.
- Tyler, A. and V. Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions*, Cambridge University Press.
- 森山新 (2005) 「格助詞ニの意味構造についての認知言語学的考察」『日本認知言語学会論文集第5巻』日本認知言語学会
- 中島尚樹 (2004) 「目的を表す助詞「に」」『日本言語学会第128回大会予稿集』(日本言語学会)
- 岡智之 (2005) 「場所的存在論による格助詞ニの統一的説明」『日本認知言語学会論文集第5巻』日本認知言語学会
- 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 (1986) 『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 菅井三実 (2001) 「現代日本語の「ニ格」に関する補考」『兵庫教育大学研究紀要』第21巻第二分冊
- 山本和之 (1995) 「移動と所在：日英語における「着在点」の語彙概念構造」『英語と英米文学』第30号 (山口大学)
- 山梨正明 (1993) 「格の複合スキーマモデル—格解釈のゆらぎと認知のメカニズム」仁田義雄編『日本語の格をめぐる』くろしお出版